学力向上フロンティアスクール中間報告書

都道府県名	静岡県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年度４月現在）

学校名	浜松市立北部中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	４	４	４	２	１４	２６
生徒数	１２７	１４４	１５１	１３	４３５	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

自ら考え，生き生きと学習に取り組む生徒の育成
～学ぶ喜びの味わえる授業作り～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

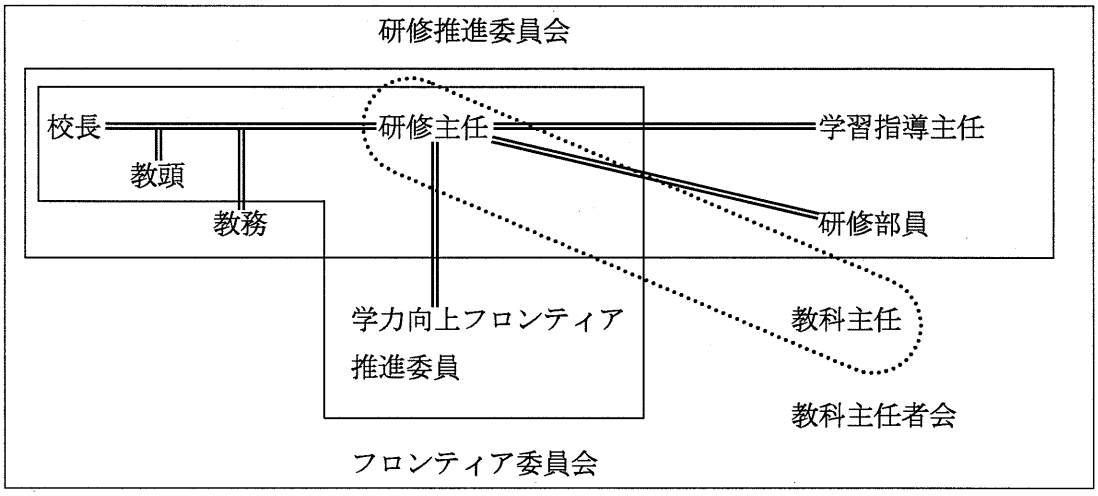
①単元ごとの授業構想および評価・評定と授業の工夫（全学年・全教科）
②２Ｃ３Ｔによる少人数習熟度別学習指導（２年・３年、英語と数学）
③総合的な学習の時間等を利用した学力向上のための指導（全学年・５教科）
④選択教科の充実（２年５教科・３年５教科）
⑤読書指導（全学年）
⑥問題分析による学力の研究（５教科）

(2)　年次ごとの計画

平成**15**年度	①単元ごとの目標・評価項目の再検討。すべての単元の構想つくり。生徒に目標把握や自己評価をさせるための手立て。板書事例の蓄積。 ②２年英語・３年数学で実施。授業研究などを行う。 ③補充コースを設定して特別指導。帰りの会を利用して３分間計算ドリルを実施。毎日、宿題として漢字プリント・英単語プリントを実施。 ④深化コースで研究発表の場を設定。 ⑤読書の時間の設定および読書習慣作りの指導。 ⑥入試問題分析とその活用。

平成**16**年度	①　全単元構想の再点検。全単元の評価項目の再点検。自己評価の方法の研究。 ②　２年・３年の数学と英語で実施。研究を推進して質の向上を図る。 ③　補充を必要とする生徒へのより効果的な特別指導の工夫・実践。毎日の計算ドリルの工夫と実践。毎日の家庭学習プリント（漢字・英単語）の実践。 ④　深化コースと補充コースそれぞれの内容の質的改善と実践。 ⑤　読書の質の向上と国語力向上、知的関心喚起を図る指導。 ⑥　学力の分析とそれを指導に生かす研究および実践。

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

①授業担当教師が、観点別の指導目標をしっかり押さえるとともに、単元の中における評価や深化・補充指導の位置づけを明確にすることができた。また生徒も、単元の学習目標を予めつかんだ上で学習に取り組むとともに、単元のねらいを踏まえて知識や技能の習得をすることができた。

・単元別の詳細目標（評価項目）を踏まえた年間指導計画の作成。
・教科ごとの「単元テスト」の実施（一斉定期テストの廃止）。
・単元構想図の作成（形成的評価・深化補充の位置づけを明確にする）。
・生徒配布用「単元学習計画表」の作成（観点別詳細目標を掲載）。
・学習振り返りのための「自己評価表」作成と実践。
・授業記録への「板書事例」の記載とその蓄積。

②「２Ｃ３Ｔ」の形で、習熟度別にクラス分けをし、少人数指導をすることによって成果を上げることができた。上位クラスは、個別に発展的に学習できるように設定し、下位クラスは、理解とドリル的要素を重視して一斉学習を軸に展開した。人数の多かった上位・中位クラスに対し、少人数の下位クラスにおいてその成果は顕著であった。

③総合的な学習の時間等を使った学力向上のための指導は、「継続が力となることの自覚」「家庭学習の習慣化」という２点で大きな成果を見た。もちろん計算力では、速さの変化を確認できたし、漢字の習得においても級別テストなどで成長が確認できた。具体的には、次に記した実践を行った。

・週２回の全校一斉の総合的な学習の時間に、学年単位の取り組みとして学力補充指導を行い、小テストなども組む。なおその時間に、補充が必要な生徒のためのクラスを設定し、少人数指導を行った。

・帰りの会の中に、「３分間計算ドリル」の時間を設定して実践。
・家庭学習の課題として「漢字プリント」を一年間毎日実践。
・家庭学習の課題として「英単語プリント」を長期にわたって実践。

④選択教科は、原則として「深化発展コース」と「補充コース」に分けて、少人数指導するとともに、趣旨を生かすための試みを行うことができた。しかし、本年度は教科・コースによっては成果が不十分なところもあった。

・３年社会科の深化発展コースの事例・・・全員個別テーマを作って課題追究し、校内文化祭で展示発表した。授業でも発表会をした。中でも意欲的な２人は、県西部の「児童・生徒社会科研究発表会」に出場して発表した。これにより社会的事象やその追究に関心を持たせることに成功した。

⑤毎朝１０分間の読書時間の設定と、意欲化の工夫により、かなり多くの生徒に読書への関心を持たせることができた。

⑥今年は、入試問題を蒐集して問題分析を行い、習得の期待される知識や技能・論述力の傾向を把握することができた。しかし、本年度は単元設計上の目標分析との関連で詳細な検討にまでは至っておらず、継続して研究する必要がある。

２．今後の課題

①本年度の研修を進める中で、学習内容の基幹部分は２月までに終了し、３月は年間の学習を踏まえた上での発展学習（深化・補充の両面で）を行うことになった。また各単元の終末部分では、必ず深化・補充の学習の時間を設定することにした。その関係で学習の基幹部分を指導する時間は多少縮減するが、それゆえに学習内容の密度や指導技術の質を高める必要がある。来年度は、そうした意味での授業改善が課題である。

②来年度の２Ｃ３Ｔは、やはり英語と数学であるが、実施する学年は増やす予定である。その中で、今年の成果を踏まえ、より効果的な実践を試行錯誤していく予定である。特に比較的成果の目立たなかった中位クラスの工夫が課題である。

③総合的な学習の時間等を使った学力向上のための指導は、単なる継続ではマンネリ化して新鮮な成果が得られなくなると考え、それぞれにおいて工夫を加えていく予定である。特に、漢字の級別テストに「チャレンジ検定」的な要素を加え、生徒の意欲化を図るとともに、教師側からレベルを上げるための積極的な目標設定を課していく予定である。また英語や数学においても同様の試みを考案、実践していきたいと考えている。

④選択教科では、実施するすべての教科で「深化発展コース」と「補充コース」の２コースを設定し、その工夫の実践例を蓄積したい。実践内容については、基本方針を打ち出すが、各教科の創意工夫を重視したい。本年度は、「補充コース」の工夫が乏しかったので、特にそれに関する指針を出したい。実践内容は、中間報告をもとに検討を加え、実践の質を高めていく予定である。

⑤朝読書の本は、現在は各自の選択に任せているのが実状であるが、来年度は、図書の内容の質的向上や、図書分野の多角化を促す工夫をしたい。
⑥学力の分析を、学力向上フロンティア推進委員を軸に本格的に行い、それを指導に生かす研究を進めたい。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

・県の学力調査テストや浜松市の学力調査テストをもとに学力分析する。
・３分間計算ドリルの結果をグラフ化して計算力の変化を把握する。
・同じレベルまたは同一の漢字テストを何度か行って変化をみる。
・生徒の意識調査や学習習慣定着度調査を行う。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・８月１１日に行われた高台中・北部中学区夏季合同研修（地区の小中学校教員全員参加による研修会）において実践の紹介を行うとともに、課題を提起して研究討議をした。
・来年度は、研究冊子や実践事例集を作成し、市内中学校に配布するとともに、北中ホームページで広く実践内容を紹介する予定である。また一定期間学校を公開し、授業を参観してもらうことも考えている。

浜松北部中ホームページアドレス
http://www.city.hamamatsu-szo.ed.jp/hokubu-j/
浜松北部中メールアドレス
hokubu-j@city.hamamatsu-szo.ed.jp

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校
【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　□１０～１２学級
■１３～１５学級　□１６学級以上
【指導体制】　■少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導
□その他
【研究教科】　■国語　■社会　■数学　■理科
■外国語　■音楽　■美術　■技術・家庭
■保健体育　□その他
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無